

優秀賞

私のランドセル

長野県 墨坂中学校 一年
内堀 桃

姉は紫色、私は赤色。それは祖父母がプレゼントしてくれた、私たち姉妹のランドセルの色です。そして、私たちの手元には、もうそれはありません。

今年の3月、私は小学校を卒業しました。卒業から10日後、私たちはランドセルをアフガニスタンの子どもに寄附するために横浜の倉庫に送りました。いざ手元からなくなると、少しさびしいのかなと思ったけれど、実際はあまり悲しくはありませんでした。きっと前から、「卒業したら海外に寄附するから大切に使って」と言われてきたからだと思います。ただ、いつも背負っていっしょに登校した赤いランドセルが、知らない誰かのものになるのは、本当は少しいやでした。

お母さんが私たちに、「最後に感謝の気持ちを込めて、きれいに拭きなさい。」と言ったけれど、私はそんな気になれず、お姉ちゃんが拭いているのを横で見ているだけでした。

段ボールにきゅうくつそうに押し込まれたランドセルを見ながら、ふと思い出したことがありました。それは下校中、雪で足をすべらせた日のことです。私はランドセルがあったおかげで、頭をぶつけずにすみました。ランドセルが私を守ってくれました。

私のランドセルが誰かのものになってしまうことを、いやだという気持ちが感謝の気持ちに変わって、今度はこのランドセルが誰かの毎日を支えることができるならと、もう一度段ボールからランドセルを出して、きれいに拭きました。

そして、プレゼントしてもらった祖父母に、寄附することを報告しようと思ってメールをしました。

『ランドセルをアフガニスタンに送ろうと思います。良いランドセルを買ってもらったから、卒業まできれいなままでした。ありがとうございました。』

すると、『それはいい考えです。良いことをすると必ず自分に返ってきて、あなたに幸せを与えてくれると信じています。「徳積み」と言います。これからも、人のために思った行動を積み重ねていきましょう。』と返信がきました。

お母さんに、ランドセルを海外に送る活動をしている団体のホームページを見せてもらうと、全国から7,800個のランドセルが届いたことがわかりました。アフガニスタンは、日本から6,000キロ離れています。5月に東京湾を出港し、10月頃アフガニスタンの子どもたちに寄附される予定だそうです。ホームページの写真には、新品の鉛筆や真っ白いノートに目を丸くして、嬉しそうにランドセルを受け取る子どもたちの姿がありました。

全国に、自分のランドセルを送ることでアフガニスタンの子どもたちの役に立てるのなら、と思う優しい子どもたちがいることを嬉しく思います。

私は、祖父母が言っていたように、これからも人のために思った行動を積み重ねていきたいと思います。これから遠くで活躍する、私のランドセルに恥ずかしくないように。